

Vision

戸塚武彦先生と日本生理学雑誌



東京医療学院大学学長
日本医科大学名誉教授

Journal of Physiological Sciences 前編集委員長 (2007-2013)

佐久間 康 夫

今般日本生理学雑誌（以下日生誌）が季刊として姿を変えて印刷・発行されることとなった。電子ジャーナルのみとすることも検討されたが、理事会での議論を経て紙媒体での刊行が並行して継続されることとなり、新しい表紙デザインも決定された。多くの会員がご存じのように、日本生理学会は1922年(大正11年)東大・橋田邦彦教授、慈恵医大・浦本政三郎教授、日本医大・戸塚武彦教授を发起人として、会長を置かず平等を重んじる自由主義的な組織として始まった。大正デモクラシーの時代である。この歴史については、浦本政三郎慈恵医大教授を初代委員長として日本生理学史編集委員会が構成され、ご門下の内山孝一日本大学教授・日本医史学会理事長が引き継がれて、他ならぬ日生誌上に1966年以来1975年まで全国の生理学教室59教室の詳細な歴史が掲載されている。1981年に酒井敏夫教授が名取委員長から引き継がれ、1983年「日本生理学教室史上巻」が日本生理学教室史編集委員会の編集で学会から上梓された。当初教室史・業績史・学会史の3点セットが計画されていたため、委員会の名称も変更されたと聞く。さて、教室史の奥付を見ると印刷所が山形県鶴岡市の鶴岡印刷株式会社となっている。日生誌に投稿すると、校正のやりとりが鶴岡だったことを不思議に思ったこともあった。たまたま小職が25年前日本医大に招かれて、戸塚先生が創設された教室を引き継ぎ、ご業績を知るにいたって漸くこの疑問が氷解した。

編集・広報委員会の上田陽一教授のご依頼をいただいた機会に、日生誌と鶴岡の縁、あるいは今年で79巻を迎えた日生誌のたどってきた途を若手会員のみなさんに改めて知っていただきたい。学会の機関誌として今日の *Journal of Physiological Sciences* の源流である *Journal of Biophysics* が1926年に橋田教授の編集のもと2巻刊行された。学会組織の整備と共に原著雑誌として1936年大日本生理学雑誌の刊行が始まり、戸塚教授が編集担当の常任幹事として奮闘されることとなった。以後戸塚先生は1965年まで編集を主宰される。第1巻から第9巻までは岩波書店で印刷されたが、大学研究者の動員が続き研究活動こそほそそと続いたものの次第に原稿が集まらなくなり、さらに不要不急誌として紙の配給が停止され、1944年12月から大日本生理学雑誌は休刊のやむなきに至った。今日紙媒体にこだわる理由のひとつである。

1945年1月28日夜、単機の焼夷弾爆撃に被災し、日本医大の本館・解剖学・病理学両教室などが烏有に帰した。ついで3月9-10日のいわゆる東京大空襲により、基礎医学教室のすべてが失われ、4月9日に山形県鶴岡市に大学が疎開した。東京復帰がなかったのは1946年9月であったが、それに先だつ1946年7月、戸塚教授は地元の鶴岡印刷株式会社の助力を得て、名称も新たに日本生理学雑誌として第10巻(1946-1948)を再開された。中断は1年8ヶ月にとどまり、以後第62巻2000年まで55年にわたり、鶴岡印刷に日生誌の印刷をお

世話いただくことになる。このことについては現在の理事長にあたる庶務幹事を勤めておられた本郷利憲教授が、2000年初頭の日生誌第63巻1号に「21世紀を迎えて」と題する巻頭言を執筆され、「鶴岡印刷に日本生理学会を代表して心から感謝申し上げます」と述べておられる。

日生誌80年の歴史は戦争が発展の途上にあった学会の活動に大きな影響をおよぼすことの例証であり、平和を希求することの重要性と、研究活

動を支える拠点が多数分散して存在することの証人でもある。かつて永井道雄氏が文部大臣（1974-1976）として民間から招かれ、大学は富士山型に集中するのではなく、八ヶ岳のように各地の特色ある大学が競いあわねばならないと発言されたことを思いだす。現在多少頭打ちになっているとはいえ、研究経費の面では比べものにならないほど豊かになった今日、改めて服膺すべき金言と思う。